

狂言 附子

◇留守番をしていた太郎冠者、次郎冠者が附子を食べてしまう場面

次郎「何とした、何とした。（兩人、また橋がかりへ逃げる）

太郎「まづは黒うどんみりとして、うまさうな物ぢや。

次郎「何ぢや、うまさうな物ぢや。

太郎「なかなか。」

次郎「それならば身共も見て来うほどに、また精を出いて扇いでおくりやれ。

太郎「心得た。」

次郎「扇げ扇げ。」

太郎「扇ぐぞ扇ぐぞ。」

次郎「扇げ扇げ。」

太郎「扇ぐぞ扇ぐぞ。」

① なかなか いかにも。

② 身共 自称の代名詞。

次郎「葛桶③の中をのぞいて」「ちゃつと退け、ちゃつと退け。

太郎「何なとした、何とした。(兩人、橋がかりへ逃げる)

次郎「おしやる通り、黒うどんみりとして、うまさうな物ぢや。(兩人、扇をたたみ、腰にさす)

太郎「身共はあの附子が食ひたうなった。行て食て来う。

次郎「イヤここな者が。向こうから吹く風に当たつてさへ滅却するほどの大の毒を、何なとして食はるるものか。

太郎「身共はあの附子に領りやうぜられたかして、しきりに食ひたうなった。行て食て来う。

次郎「身共が側そばにゐるからは、やることはならぬ。(太郎冠者の袖を取る)

太郎「ここを放しておくりやれ。

次郎「放すことはならぬ。

太郎「放せと言ふに。

次郎「ならぬと言ふに。

太郎「名残の袖を振り切りて、(次郎冠者の押さえている袖を振り放し)附子つしの側そばにぞ寄りにける。(謡いながら葛

桶に近づく)

次郎「アリヤ、附子の側へ寄りをつた。おのれ、今に滅却せうぞ。

太郎(扇を取り出し、それを飴棒あめんぼうのように使つて葛桶の中の物を食べる)「アムアムアムアム⑥。

次郎「アリヤ、附子を食ふわ食ふわ。おのれ、今に滅却せうぞ。

太郎(左手で額を押さえて)「アア、たまらぬ。たまらぬ。

次郎「そりや滅却した。(我を忘れて太郎冠者のそばへ駆け寄り、扇を貸し)ヤイヤイ太郎冠者、気をははつたと持て、

③ 葛桶 狂言の小道具の一つ。円筒形の桶。

④ どんみりと どろりとした様子。

⑤ 領ぜられたか 取りつかれた

⑥ アムアムアムアム 物を食べる時の擬音語。

⑦ はつたと しっかりと。

◇帰宅した主人に対して太郎冠者、次郎冠者が言い訳をする場面

主 「立ち、一の松まで出て」「やうやう用のごまをしまつてござる。兩人の者に留守の程を申し付けてはござれども、心もとなうござるによつて、急いで戻らうと存ずる。(本舞台にはいり)イヤ何かと申すうち、はや戻つた。

太郎「そりやお帰りぢや。泣け。(兩人泣く)

主 「ヤイヤイ兩人の者、今戻つたぞ、今戻つたぞ。(兩人泣き続ける)これはいかなこと、それがしが戻つたを喜びはせいで、なぜそのやうに落涙するぞ。

太郎「次郎冠者、申し上げてくれい。

次郎「太郎冠者、申し上げてくれい。(兩人とも泣き続ける)

主 「ヤイヤイ、心もとない。どちらかなりとも早う言へ。

太郎「それならば私から申し上げませう。大事のお留守でござるによつて、眠つてはなるまいと存じ、次郎冠者と相撲を取つてござれば、次郎冠者が強うござるによつて、私を目より高う差し上げ、既に投げうと致しましたによつて、投げられてはなるまいと存じ、あのお掛け物に取りついてござれば、(脇柱のほうをさし)あれ、あのやうに破れました。(泣く)

主 「これはいかなこと、秘蔵の掛け物を散々にしをつた。

次郎「それを取つて返すとて、大天目の上へズデイドウ。(目付柱のほうをさし)あれ、あのやうに微塵になりまして。(兩人、激しく泣く)

⑩それがし 自称の代名詞。

⑪既に もう少して。

⑫お掛け物 掛け軸。

⑬大天目 室内の装飾用の茶碗。

主 「南無三宝、秘蔵の天目まで微塵にしをつた。おのれら両人生けておく奴ではないぞ。」

太郎 「とても生けてはおかれまいと存じ、附子¹⁴など食て死なうと思つて、(次郎冠者に)なう次郎冠者、次郎「才オ。」

主 (葛桶の中を見て)これはいかなこと、附子¹⁵まで皆¹⁶にしをつた。きてもきても憎い奴でござる。(肩衣の片袖を

脱ぐ)

太郎 「二口食へども死なれもせず、次郎「二口食へどもまだ死なず、太郎「三口四口、次郎「五口、太郎「十口余り、

(このあたりから兩人立ち、舞い始める) 太郎 「皆になるまで食たれども、死なれぬことのためでたさよ、アラ、¹⁷

頭固やんにや。(兩人、舞いながら主の頭を扇で打つて、大笑いする)

主 「何の頭固やんにや。(扇を振り上げる)

太郎 「アア、許させられい。 次郎 「許させられい。許させられい。(逃げ入る)

主 「おのれ、どちへ行く。あの横着者、誰ぞ捕らへてくれい。やるまいぞやるまいぞ。やるまいぞやるまいぞ。(追

い込む)

◆ 出典 『新編日本古典文学全集 60 狂言集』(北川忠彦・安田章校注・訳、小学館、二〇〇一年)

⑭ 南無三宝 驚きや後悔を表す感動詞。

⑮ 附子など 附子をば。

⑯ 皆にしをつた すっかりなくしてしまった。

⑰ 頭固 丈夫なこと。

⑱ 横着者 相手をののしる時の言葉。